

【構想の名称】(選定年度24年度(申請区分(I)))

アジアの新出課題解決に向けたエビデンスベースアプローチ大学コンソーシアム

【プログラムの目的・養成する人材像】

ASEAN共通課題である「健康・公衆衛生」「環境・エネルギー」「防災・セキュリティ」の3分野において、日本とASEANが協力しながら、諸問題を解決できる人材の育成を目指す。具体的には、課題先進国日本での知見を活かしつつ、“Resilience, Innovation and Sustainability”に考慮しながら問題を解決できる専門的なグローバル人材、“ASEAN EBA リーダー”の育成を図る。

【構想の概要】

本構想で掲げる「エビデンスベースアプローチ(以下、EBA)」とは、様々な分野の課題解決プロセスにおいて、ビッグデータを活用し、データに基づいた事実の分析およびその分析に基づいた正しい解決アプローチの考案を行うとともに、それを実践する手法・考え方である。本構想では、日本とASEANの計7大学でコンソーシアムを形成し、「EBA」を軸に据えた共同教育プログラム「EBAコース」を開発するとともに、参加大学の学生が学部課程から専門知識と実践力を学びあう環境を作る。また、5年間で延べ420名の学生交流(派遣/受入)を実現する。

■ 質の保証を伴った大学間交流の枠組形成に向けた取組

○ EBA 大学コンソーシアムの実現と継続

本プログラムでは、ASEAN地域のパートナー大学との対等な関係によるEBA大学コンソーシアムを運営し、EBAカリキュラムの策定やサーティフィケートの発行を実施してきた。本年度のコンソーシアム会議において、本事業の終了後も継続してコンソーシアムを運営する事で合意した。

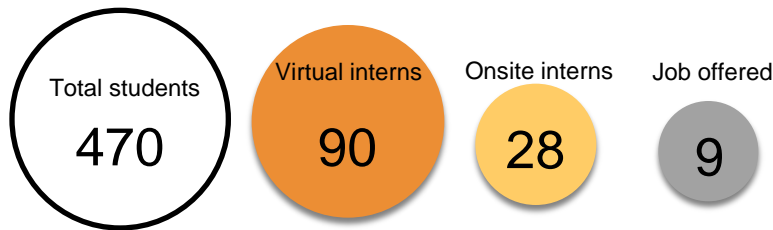
○ コンソーシアムによるサーティフィケートの発行

フィールドワーク等の科目修了時には、修了要件を満たした学生に対してコンソーシアムがコンポーネントサーティフィケートを発行する。サーティフィケートには学習内容が明記され、取得者が持つスキルや知識の可視化を実現している。また、慶應義塾大学主催のフィールドワークや日本語授業では、単位認定を行っている。さらに、カリキュラムが定める所定のコンポーネントサーティフィケート取得により、EBAプログラム修了を示すプログラムサーティフィケートが発行されている。



〈図1.サーティフィケートの学習内容可視化〉

■ 交流プログラムの内容、今後の開始に向けた準備状況



〈図2.インターンシップの全体像〉

■ 交流プログラムにおける学生のモビリティ

○ 慶應義塾大学生の派遣

H28年度は、当初の予定を大幅に超える89名の学生をパートナー大学が実施するフィールドワークに派遣した。全パートナー大学において、要件に見合うフィールドワークが提供可能となり、安定した学生派遣を実施できる環境が整ってきている。

○ 外国人留学生の受入れ

H28年度は、予定数を超える67名の学生を、水俣、鶴岡、富士吉田、三陸で実施したフィールドワークに受け入れた。これらのフィールドワークには、慶應義塾大学の学生も参加し、ホストとして留学生の世話役や案内役を務めるなど、ASEAN学生との交流を図っている。

| | H24 | H25 | H26 | H27 | H28 |
|-------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 学生の派遣 | 7 | 14 | 4 | 67 | 89 |
| 学生の受入 | 4 | 19 | 42 | 77 | 67 |

(表 学生交流数)

■ 日本人学生の派遣・留学生の受入を促進するための環境整備

○ フィールドワークガイドラインの整備

EBAコンソーシアムの実践科目として、一貫した価値を持った質の高いフィールドワークを各パートナー大学が提供できるよう、フィールドワーク実施のガイドラインを整備した。フィールドワーク実施にあたっては、実施の半年ほど前から、各大学のフィールドワーク担当者とガイドラインをベースに調整を行うことで、以前よりも各プログラムの実施アナウンスなどが早期に可能となり、学生の利便性も向上した。

○ 学事日程の調整

パートナー大学間で学事日程が異なるため、各大学の学生が比較的参加しやすい、8月および2、3月の2つの時期に集中的にフィールドワーク等を計画し、学生交流が実現するように調整を行った。

■ 構想の実施に伴う大学の国際化の状況 情報の公開・成果の普及

○ Open Research Forum におけるセッションの開催

本事業における5年間の成果公表を目的として、2016年11月に開催されたSFC Open Research Forumでセッションを開催し、現在日本企業に就業するインターンシップ参加者や、彼らを採用した企業関係者等の意見も交えつつ、議論を展開した。



〈図3.SFC Open Research Forum 2016でのセッション〉